

NHỮNG TRỢ TỪ TIẾNG NHẬT KHÓ ĐỐI VỚI NGƯỜI VIỆT HỌC TIẾNG NHẬT (TRỢ TỪ CÁCH "WO")

SUGIMOTO TAEKO*

Dựa trên kết quả điều tra quy mô nhỏ về các vấn đề ngữ pháp đối với sinh viên trường Đại học Ngoại ngữ (nay là Trường Đại học Hà Nội), bài viết nêu các lỗi sai trong việc sử dụng trợ từ cách "wo" và mô tả chức năng của trợ từ này cũng như nêu thực trạng và xu hướng sử dụng sai trợ từ cách này. Cuộc điều tra tiến hành vào tháng 3 năm 2002 trên 94 sinh viên Khoa tiếng Nhật của Trường Đại học Hà Nội (đã học tiếng Nhật được khoảng 2,5 năm). Chúng tôi đã sử dụng phương pháp phát phiếu điều tra. Kết quả điều tra cho thấy trong số 20 câu hỏi liên quan đến trợ từ, tỉ lệ trả lời đúng ở những câu hỏi liên quan đến nơi chốn và di chuyển được thể hiện bằng trợ từ "ni" cũng như ở những câu hỏi có chủ thể động tác và sự thay đổi được thể hiện bằng trợ từ "ga" chiếm tỉ lệ rất cao. Ngược lại, những câu trả lời sai xuất hiện nhiều ở cách dùng sai trợ từ "wo", ví dụ như có câu đáng lẽ phải trả lời là "ga", nhưng sinh viên lại trả lời bằng "wo", hoặc trả lời "wo" đối với những câu lẽ ra phải trả lời bằng "ni". Những cách dùng sai như trên cho thấy có sự liên quan chặt chẽ đến cách sử dụng của trợ từ "wo". Về cách sử dụng trợ từ "wo", trước hết trợ từ này dùng để biểu thị tân ngữ, tuy nhiên đôi khi các tân ngữ cũng là các động từ với sự tham gia của trợ từ "ga", "ni" hoặc là các tính từ. Do sinh viên khó phân biệt tân ngữ được thể hiện bằng trợ từ "ni" với tân ngữ được thể hiện bằng trợ từ "wo" nên tỉ lệ trả lời sai các câu hỏi khá cao. Bên cạnh đó, các trợ từ cách "wo" và "ga" sử dụng cho việc phân biệt nội động từ và ngoại động từ; lại có thể sử dụng đối với các câu chủ động và bị động. Để mô tả sự thay đổi, nội động từ dùng trợ từ "ga", ngoại động từ dùng trợ từ "wo" và có nhiều cặp nội động, ngoại động từ. Tân ngữ sử dụng trợ từ "wo" trong câu chủ động khi chuyển thành câu bị động được thay bằng trợ từ "ga". Tóm lại, trợ từ cách "wo" và "ga" có một số mối liên hệ qua lại nên người học thường hay sử dụng sai và các câu trả lời sai trong cuộc điều tra thường rơi vào các trường hợp nội động từ/ngoại động từ hay các câu chủ động/bị động. Như vậy, trong số các trợ từ cách có cùng mục đích sử dụng, trợ từ "wo" có khá nhiều cách sử dụng về mặt ngữ pháp mà việc phân biệt khi sử dụng phức tạp và khó. Vì vậy, kết quả là có nhiều câu trả lời sai liên quan đến trợ từ "wo" và đây được xem là một trợ từ khó khi học tập tiếng Nhật.

* GS., Trường Đại học Ibaraki, Nhật Bản

ベトナム語圏学習者にとって習得しにくい助詞：格助詞「を」を中心に

茨城大学 杉本 妙子

1. はじめに

ベトナム語圏学習者に限らず、日本語を習得する上で、日本語文法は発音・語彙等に比べると習得しにくいものとして捉えられることが多い。学習者からしばしば“日本語の文法は難しい”と言う声を聞くところである。そして、日本語文法の中でも、特に日本語の助詞はもっとも習得しにくいものとされることが多い。その理由として、日本語の統語が助詞に多くを依存していること、そのことから、統語上、語順（文節の順番）が必ずしも決定的な役割を果たさないことなどが挙げられる。

そこで本発表では、発表者がハノイ外国語大学（現ハノイ大学）で行った文法についての小調査結果をもとに、ベトナム語圏学習者にとって習得しにくい助詞の中でも格助詞「を」を中心に上げ、助詞の働きと誤用の実態・傾向について述べる。

2. 文法調査の概要

調査時期：2002 年 3 月

調査場所：ハノイ外国語大学（現ハノイ大学）日本語学部教室ならびにハノイ国家大学社会人文科学大学東洋学部日本学科教室

被調査者：ハノイ外国語大学日本語学部 3 年生 94 名、日本語学習歴は約 2 年半程度。

調査の方法：

- ・穴埋めと選択肢の選択による文法問題形式の調査票を配布し、問いに回答し終わった後に回収するやり方で調査。
- ・ハノイ外国語大学において、同大学教員の協力の下に実施。

調査票：

- ・調査票は A4 用紙 1 枚に両面印刷した 2 ページ。
- ・調査項目は、筆者が 2001 年に実施した予備調査としての文法調査、筆者が行ったベトナム人日本語学習者の作文調査、村崎恭子（1978）を参考に選定。ボイス、テンス、アスペクト、活用等についての 15 項目と、助詞についての 20 項目。
- ・調査票のうち、助詞についての 20 項目の設問は下記のとおり。

日本語の文法についての問題

C ()の中に、助詞を入れて文を完成させてください。また、助詞を入れなくてもいい場合は、()の中に × を書いてください。

- ① 工業 () 発達すると、国の経済も人々の生活もよくなる。
- ② 5時間も電車 () 乗って、やっとハノイに着いた。
- ③ Economic animal ということばで、欧米人から日本人の働き方 () 非難されている。
- ④ ワールドカップでは、みんな自分の国のチーム () 応援しています。
- ⑤ 注意すべきことは、いくつ () ありますか。
- ⑥ Phu さん () 日本語を研究しようと思った理由は何ですか。
- ⑦ アジアの平和のために何ができるか、日本人 () 考えて行動してほしい。
- ⑧ このコンピュータの説明書は、難しい用語 () たくさん使われている。
- ⑨ たくさんの日本の若者はアメリカ人の生き方 () あこがれています。
- ⑩ 同じ大学 () 卒業しても、男性のほうが給料の高い良い会社に就職できます。
- ⑪ 今年は日本語能力試験 () 挑戦します。
- ⑫ 毎日暑いので、早く夏休み () きてほしい。
- ⑬ 料理は毎日食べるものだから、体にいい材料 () 作りたいです。
- ⑭ 経済発展とともに、ごみ () 増えて、問題になっている。
- ⑮ 私の家から会社まで、通勤時間は30分 () かかる。
- ⑯ もし、自信 () 失ったら、発表はうまくできないでしょう。
- ⑰ 戦争のせいで、人々の心には深い悲しみ () 残っている。
- ⑱ 私は大学の寮 () 住んでいます。
- ⑲ 明日は早く起きて日本語勉強会 () 参加する予定です。
- ⑳ 自転車に乗って、ハノイの街の有名な場所 () 見学しました。

3. 調査の結果

文法小調査の結果について、設問Cで取り上げた助詞の項目を示した後に、正答・誤答の状況や誤用と考えられる回答について示し、誤用の傾向等を述べていく。

〔取り上げた項目〕

設問Cは、上掲の設問文の () 中に適切な助詞（主に格助詞）を入れるものであり、一部、助詞が不要な場合もある。それぞれの設問文は以下の助詞項目についての設問である。

・格助詞ガ…①、③、⑥、⑧、⑫、⑭、⑰ *③はハも可。⑧・⑭はモも可。

・格助詞ニ…②、⑦、⑨、⑪、⑱、⑲ *⑦はハ・ニハも可。⑲はニモも可。

・格助詞ヲ…④、⑩、⑯、⑳ *④はハも可。⑳ハモも可。

・格助詞デ…⑬

・助詞不要φ…⑤、⑮ *⑤・⑮はモも可。

この設問Cの20問の結果は下記のとおりである。助詞が不要な場合(⑤・⑮)は「φ」を用いる。回答者は94名であるが、一部、複数回答をしたものも含まれるので、回答数の合計が回答者数を越える場合がある。なお、不正解の例は、3人以上からの回答があったもののみで、それ以外は省略した(誤回答の合計が3名以下の場合を除く)。

① 正解: ガ 49名(51.1%) 不正解: ヲ・ハ・ノ・φ 44名(46.8%) 無回答 2名(2.1%)

② 正解: ニ 90名(95.7%) 不正解: ヲ・デ 3名(3.2%) 無回答 1名(1.1%)

③ 正解: ガ・ハ 34名(36.2%) 不正解: ヲ・ニ・マデ・他 55名(58.5%) 無回答 5名(5.3%)

④ 正解: ヲ・ハ 64名(68.1%) 不正解: ニ・他 28名(29.8%) 無回答 2名(2.1%)

⑤ 正解: φ(・モ) 49名(51.1%) 不正解: ガ・カ 43名(45.7%) 無回答 2名(2.1%)

⑥ 正解: ガ・ノ 72名(76.6%) 不正解: ハ・φ・他 20名(21.3%) 無回答 1名(1.1%) *複数回答3

⑦ 正解: ニ・(ニ)ハ・モ 49名(51.1%) 不正解: ガ・ヲ・ノ・ト・他 43名(45.7%) 無回答 3名(3.2%) *複数回答1

⑧ 正解: ガ・モ 64名(68.1%) 不正解: ヲ・デ・他 29名(30.9%) 無回答 1名(1.1%)

⑨ 正解: ニ 43名(45.7%) 不正解: ヲ・ガ・φ・他 48名(51.1%) 無回答 1名(1.1%) *複数回答2

⑩ 正解: ヲ 84名(89.4%) 不正解: ニ・デ・他 10名(10.6%)

⑪ 正解: ニ 40名(42.6%) 不正解: ヲ・ガ・他 52名(55.3%) 無回答 2名(2.1%)

⑫ 正解: ガ 62名(66.0%) 不正解: ニ・ハ・ヲ・他 32名(34.0%)

⑬ 正解: デ 13名(13.8%) 不正解: ヲ・ガ・他 80名(85.1%) 無回

- 答・他： 2名 (2.1%) *複数回答 1
- ⑭ 正解：ガ・モ 84名 (89.4%) 不正解：ヲ・ハ 8名 (8.5%) 無回答 1名 (1.1%) *複数回答 1
- ⑮ 正解：φ・モ 44名 (46.8%) 不正解：ガ・グライ・デ・ヲ・他 46名 (48.9%) 無回答 1名 (1.1%) *複数回答 3
- ⑯ 正解：ヲ (・モ) 42名 (44.7%) 不正解：ガ・他 38名 (40.4%) 無回答 2名 (2.1%)
- ⑰ 正解：ガ 59名 (62.8%) 不正解：ヲ・ニ・他 34名 (36.2%)
- ⑱ 正解：ニ 92名 (97.9%) 不正解：デ 2名 (2.1%)
- ⑲ 正解：ニ (・ニモ) 74名 (78.7%) 不正解：ヲ・デ 20名 (21.3%)
- ⑳ 正解：ヲ (・モ) 64名 (68.1%) 不正解：デ・ニ・ヘ・他 29名 (30.9%) 無回答 1名 (1.1%)

調査結果をみると、正答率が 100%近いものもあれば 10%台のものまであり、正答率の差が大きいことが指摘できる。このことは、習得しやすい助詞やその使い方がある一方、習得しにくいものもあるということと考えられる。

そこで、助詞の働きや述語との関係と習得のしやすさの差異について注目しながら、より詳細に見ていく。

4. 助詞の働き・述語との関係と正答率・誤用出現の差異

前節で示した設問Cの結果を、正答率・誤用率の程度によってまとめると、次のとおりである。なお、設問の助詞がどのような語に後接するか、どのような述語 (動詞等) が後ろに来るか、何を修飾するかということと、これらの助詞の習得とは密接に関わっていると考えられるので、以下では正答率順において「〔語〕助詞+述語等」の形で示す。誤答率順では「正答→誤答」の形で示す。正答・誤答が複数ある場合は、回答者数を< >内に示す。

(1) 正答率順による調査結果

- 正答率 90%～ ⑱〔寮〕ニ+住む (97.9%)、②〔電車〕ニ+乗る (95.7%)
- 正答率 80～90%未満 ⑩〔大学〕ヲ+卒業する (89.4%)、⑭〔ごみ〕ガ<70>・モ<14>+増える 84名 (89.4%)
- 正答率 70～80%未満 ⑲〔勉強会〕ニ+参加する 74名 (78.7%)、⑥〔人〕ガ+研究する<45>・〔人〕ノ+研究しようとする理由 72名 (76.6%)
- 正答率 60～70%未満 ④〔チーム〕ヲ<62>・ハ<2>+応援する 64名 (68.1%)、⑧〔用語〕ガ+使われる 64名 (68.1%)、⑳〔場所〕ヲ+見学する 64名 (68.1%)、⑫〔夏休み〕ガ+来てほしい (66.0%)、⑰〔悲しみ〕ガ

+残る (62.8%)

正答率 50~60%未満 ① [工業] ガ+発達する (51.1%)、⑤ [いくつ] φ
 +ある 49名 (51.1%)、⑦ [日本人] ニ<22>・ハ<26>・モ<1>+考えて
 行動してほしい (51.1%)

正答率 40~50%未満 ⑮ [30分] φ<29>・モ<15>+かかる (48.8%) ⑨ [生
 き方] ニ+あこがれる (45.7%)、⑯ [自信] ヲ+失う (44.7%)、⑪ [試
 験] ニ+挑戦する 40名 (42.6%)

正答率 30~40%未満 ③ [働き方] ガ<10>・ハ<24>+非難される (36.2%)

正答率 10~20%未満 ⑬ [材料] デ+作りたい (13.8%)

この正答率順の調査結果を見ると、まず、場所や着点（乗り物）を表すニ
 (⑮、②) の正答率が高いことが指摘できる。場所を表すことばにつくニや着
 点のニは、格助詞ニの働きの中でも主要なものである。また、対応する述語が
 場所を表すニでは「住む」、着点（乗り物）では「乗る」であることも、正答
 率の高さにつながっていると考えられる。しかし、同じニでも、⑨や⑪のよう
 にニが対象を表す場合の正答率は低く、誤答率が 50%を越える高さとなってい
 る。

次いで正答率が高く、よって誤答率が低いのは、起点を表すヲ (⑩) や動
 作・変化などの主体を表すガ (⑭、⑥) である。

格助詞ヲは、動作・作用の対象を表す用法が第一の用法と言えるが、抽象
 的な起点を表したり動作に注目する表現の場合にも使うことができる。このヲ
 は、起点を表すカラと間違えられやすいものとして取り上げられるものだが、
 この調査では誤用が少なかった。これは、ヲが場所を表す語「大学」につき、
 述語が「卒業する」であるから、つまり「大学ヲ卒業する」の文型の設問とな
 っており、学習者もこの文型で習得されているからだろう。

主体のガ（いわゆる主語のガ）については、ガの第一の用法であり、初級
 の早い段階から学ぶものであり、正答率が高いという結果が出たことは、当然
 のことであろう。

(2) 誤用率順による調査結果

誤用率 0~10%未満 ⑮ニ→デ<2> (2.1%)、②ニ→ヲ<2>・デ<1> (3.2%)、
 ⑭ガ→ヲ<5>・ハ<3> (8.5%)

誤用率 10~20%未満 ⑩ヲ→ニ<4>・デ<4>・他 (10.6%)

誤用率 20~30%未満 ⑥ガ→ハ<13>・φ<4>・他 (21.3%)、⑮ニ→ヲ<17>・
 デ<3> (21.3%)、④ヲ→ニ<24>・他 (29.8%)

誤用率 30~40%未満 ⑧ガ→ヲ<19>・デ<7>・他 (30.9%)、⑳ヲ→デ<17>・

ニ<7>・ヘ<4>・他 (30.9%)、⑫ガ→ニ<13>・ハ<11>・ヲ<5>・他 (34.0%)、
⑰ガ→ヲ<22>・ニ<9>・他 (36.2%)

誤用率 40～50%未満 ⑩ヲ→ガ<34>・他 (40.4%)、⑤φ→ガ<26>・カ<17>
(45.7%)、⑦ニ→ガ<31>・ヲ<4>・ノ<3>・ト<3>・他 (45.7%)、①ガ
→ヲ<28>・ハ<7>・ノ<3>・φ<3> (46.8%)、⑮φ→ガ<30>・グライ<6>・
デ<5>・ヲ<4>・他 (48.9%)

誤用率 50～60%未満 ⑨ニ→ヲ<23>・ガ<18>・φ<3>・他 (51.1%)、⑪ニ→
ヲ<35>・ガ<11>・他 (55.3%)、③ガ→ヲ<25>・ニ<20>・マデ<4>・他 (58.5%)

誤用率 80～90%未満 ⑬デ→ヲ<47>・ガ<29>・他 (85.1%)

上の誤答率順や誤回答した助詞に注目して見てみる。上で指摘した正答率
の高いものは、同然のことながら誤答率が低い結果となっている。そして、誤
答率が高いものとしては、助詞ヲに関わるものが多い。具体的には、ガとする
べきところをヲとした回答 (①、③、⑧など) やニとすべきところにヲを回答
したもの (⑪、⑨など) など、誤ってヲを回答したというものが多い。

そこで、格助詞ヲの働きならびにヲとニ・ガとの関係について、益岡隆志・
田窪行則(1987)によって確認する。なお、下記の引用では原文のふりがなは省
略する。

2 を

①動作・作用の対象 例：本を読む。／財布を落とす。

②移動の経路・動作の場所 例：坂道を下る。／階段を上る。／家の
前を通り過ぎる。／空を飛ぶ。

③期間を表す 例：楽しい時間を過ごした。

④起点を表す 例：車を降りる。／部屋を出る。 (p. 4)

また、この①～④に示したヲの働きならびにニ・ガと関係する働きについ
て、以下のように説明している。なお、具体的な例文は省略する。

1-1 変化するものをガで表す動詞とヲで表す動詞がある。 (p. 10)

1-2 変化するものをガで表す「開く」、「倒れる」のような動詞を自動詞とい
い、ヲで表す「開ける」、「倒す」のような動詞を他動詞という。日本語には、
形の違う自動詞と他動詞の対が多い。 (p. 10)

2-1 動作の対象は、一般にヲで表される。 (p. 12)

2-3 可能(能力)、所有、必要の意味を表す形容詞(いわゆる「形容動詞」も
含む)も、対象をガで表す。この種の形容詞には、「上手だ」「下手だ」「得
意だ」「苦手だ」「うまい」「多い」「少ない」「ない」「必要だ」などがあ
る。 (p. 12)

3-1 動作の対象をヲで表す動詞の中には、人の感情を表す動詞も含まれる。この種の動詞には、「好む」「好く」(中略)「うらやむ」「ほしがる」などがある。(p. 14)

3-2 これに対して、人の感情を表す形容詞は、対象をガで表す。この種の形容詞には、「好きだ」「嫌いだ」「ほしい」「怖い」「恐ろしい」(中略)などがある。(p. 14)

5-1 動作の対象は、一般にヲで表す。(p. 18)

5-2 これに対して、動作の対象をニで表す動詞もある。この種の動詞には方向性を持った動きを表すもの(例えば、「もたれる」「吠える」「かみつく」「飛びつく」)、対人的態度を表すもの(例えば、「同情する」「謝る」「仕える」「なつく」「味方する」)、物事に対する態度を表すもの(例えば、「従事する」「関わる」「親しむ」「慣れる」「備える」)、などがある。(中略)

注 「耐える」「頼る」など一部の動詞は、対象をヲとニのどちらでも表すことができる。(p. 18)

6-1 人の感情を表す動詞には、対象をヲで表すものと、ニで表すものがある。(p. 20)

6-3 一方、能動的・持続的な感情の場合には、対象をヲで表す。(以下省略)(p. 20)

以上の記述の中で注目すべき点は、次の3点である。

- ・一般に対象はヲで表す。
- ・しかし、対象をガやニで表す動詞・形容詞もある。
- ・ヲとガは、他動詞と自動詞とに対応する。

つまり、「対象」はヲだけでなく、述語によってはガやニでも表され、特にニで対象を表す場合は、上述の2-1の注、5-2、6-1、6-3に記述されているように、そのヲとの使い分けが複雑だと言える。しかも、対象を表すヲとニについては、日本語母語話者であっても使い方にゆれがあることを、筆者も確認している(杉本(1998))。さらに、対象をニで表す動詞は、日本語では自動詞として扱うが、日本語以外の言語においても、それらの動詞が常に「自動詞」として使われているわけではない。例えば、「憧れる」(⑨)に当たるベトナム語 *hâm mộ* や「挑戦する」(⑩)に当たる *thách* は、これらの後ろに対象を表す語が来るが、それは日本語の他動詞文に相当するベトナム語文の目的語と何ら変わらない。したがって、第二言語としての日本語習得において誤用が出やすくなることは当然のことだと言えるだろう。

日本語の自動詞・他動詞は変化するものを表すのに、自動詞はガ、他動詞はヲと対応する。また、ペアになる自動詞・他動詞が多く、その形も似ている。

漢語動詞の中には自動詞・他動詞同形のものもある。したがって、ベトナム語のように自動詞・他動詞の形態上の差異や補語の取り方の違いがない、あるいははっきりしていない言語を母語とする場合、誤用が起きやすくなるものと考えられる。上の①の「発達する」も、漢語動詞であり、自動詞・他動詞の区別がしにくいものと言えるだろう。また、他動詞能動文でヲをとる目的語（対象）は、受身文になるとガ格をとる。そこで、上の③・⑧のように能動文で「～ヲ非難する」「～ヲ使う」とヲ格目的語をとる動詞では、受身文になったとき、「～ガ非難される」「～ガ使われる」とヲからガへ変えなければならない、このあたりも誤用の出やすい要因となっていると考えられる。

このように、助詞の使い方の中でも、格助詞ヲは同様の働きをする他の格助詞との間で、その使い分けの複雑さ、難しさから、ヲをめぐる誤用が本調査結果においても多く出てきたものと言えるだろう。

5. おわりに

ハノイ外国語大学（現ハノイ大学）学生を対象とする文法調査をもとに、格助詞ヲを中心に助詞の機能と誤用との関係について、調査結果の実態を示し、考察した。調査項目に限りがあることから、この調査結果から指摘できたことは多いとは言えないが、ベトナム語圏学習者に対する日本語教育の現場で気づく助詞、特に格助詞ヲに関する誤用については、ある程度の確認はできたと思われる。しかし、今回の発表で取り上げたのは調査結果の一部であり、また、調査そのものも限られたものであったので、ベトナム語圏学習者の文法に関する誤用の全般については、今回の発表を踏まえて今後も継続して順次調査し、分類・分析するという、基本的な行為の積み重ねが必要だろう。それによって、ベトナム語圏学習者にとっての日本語文法習得、あるいは文法教育に資することのできる、より良い研究が可能となるものと考えている。今後の課題としたい。

本研究は、調査そのものは杉本個人が行ったものだが、研究成果としては科学研究費補助金基盤研究（C）「ベトナム人に対する効果的日本語教育のための基礎研究：音声・文法と人材育成の点から」（2007-09 年度課題研究番号 19520440 研究代表者杉本妙子）による成果の一部でもある。

《参考文献》

- 杉本(1998) 「対象を表す格助詞「を」も「に」もとる動詞小考—日本語学習者の誤用を手がかりにして—」、『佐賀大国文』（佐賀大学）26 号
 益岡隆志・田窪行則(1987) 『日本語文法セルフマスターシリーズ 3 格助詞』、くろしお出版

村崎恭子(1978) 「アジア留学生の日本語のクセ」、『言語生活』No.322、筑摩書房

〔付記〕 本稿で取り上げた文法調査において、調査にご協力くださったハノイ外国語大学日本語学部（現ハノイ大学日本学部）の先生方、学生の皆様に感謝申し上げます。また、本稿では触れることができなかったハノイ国家大学社会人文科学大学東洋学部日本学科の先生方、学生の皆様の調査へのご協力にも、あわせて感謝申し上げます。

調査結果のとりまとめでは茨城大学大学院人文科学研究科の松崎千恵美さんに協力いただいたことも、記して感謝します。